# 19世紀末北イタリアの農民運動家

横　山　隆　作

## I．は　じ　め　に

本稿においては，1880年代以降の19世紀末の，北部イタリア，ポー河下流域の農業地帯における農業労働組合運動や協同組合運動などの農民運動を指導した人々の思想と行動が焦点となっている。本稿はこれによって，この時代に勃興し，20世紀にイタリア労働運動の最大の地盤となった地域の農民運動の特徴，それも主として思想ないし文化の面での特徴をとらえようと試みたものである。そしてこれはまた筆者の課題とする1892年から1911年に至る時期のイタリア労働運動史研究の一部分をなすものである。[1)]

**注**

1）　本稿は19世紀末のイタリア労働運動を研究対象とした拙稿,「試論：イタリア資本主義の発達と大衆運動－19世紀末の農民問題を中心に－」慶應義塾大学経済学会編『三田学会雑誌』第66巻1号，昭和48年1月刊，68～81頁，「イタリア社会党の結成（1879年～1892年）」『淑徳大学研究紀要』第15号，昭和56年3月刊，105～121頁，「イタリア社会党と議会（1892年～1900年）」『淑徳大学研究紀要』第19号，昭和60年3月刊，97～115頁，「イタリアの相互扶助協会（1886年～1910年）」『淑徳大学研究紀要』第20号，1986年5月刊，69～87頁，を補足するものである。このことと，『淑徳大学研究紀要』本号においては所載論文の紙幅を削らなければならないという事情とによって，本稿では関連する社会状況等の説明をかなり省略したということをあらかじめおことわりしておきたい。なお19世紀末のロムバルディーア州の農業構造については次の著作を参照されたい。堺憲一『近代イタリア農業の史的展開』名古屋大学出版会，1988年，第2章。また，マッツィーニ（Giuseppe Mazzini1805年生～1872年没），ガリバルディ（Giuseppe Garibaldi1807年生～1882年没），バクーニン（Mikhail Aleksandrovich Bakunin1814年生～1876年没）とイタリア近代史については次の著作を参照されたい。山崎功『イタリア労働運動史』青木書店，1970年。森田鉄郎，弓削達，北原敦『イタリア史』山川出版社，1976年。ジュリアーノ・プロカッチ，豊下楢彦訳『イタリア人民の歴史』第II巻，未来社，1984年。藤沢房俊『赤シャツの英雄ガリバルディ』洋泉社，1987年。

## II．ラ・ボイェ！事件裁判の被告

1886年にヴェネツィア重罪裁判所で行われたラ・ボイェ！（La boje！，強い憤りを表すかけ声，叫び声の一種）事件の裁判は，イタリア労働運動史上の有名な出来事である。この22名の被告はロムバルディーア州マントヴァ県に組織された2つの労働者相互扶助協会――但し実質的には労働組合活動を行う――の指導者や活動家であった。

1880年12月，世界的な農業恐慌がイタリアにも波及し，農産物価格は急落し，ポー河下流域の農業地帯は重大な経済的打撃を受けた。1880年代以降1890年代を通じて，播種面積が減少し，労務費を節約するために農業機械が導入され，農業労働者の就業機会は減少した。当時この地方では，日雇農業労働者（braccianti）はもとより，常雇農業労働者（obbligati）の多くにしても，春夏秋の3シーズンにしばしば1日に16時間も働き，冬期の約3カ月間は仕事が無く，したがって収入も無い。彼らの生活水準は極めて低く，ラ・ボイェ事件裁判の弁護士の一人であったフェッリ（Enrico Ferri）の陳述によれば，夫婦と子供2人の家庭では少くとも年間700リラ弱の家計費を要すると計算されるにもかかわらず，日雇農業労働者は夫婦と子供まで稼いで年間500リラ弱の収入しか得られないという。[2)]

日雇農業労働者は地域によっては農業就業人口の半数を占めるほど多いが，彼らの主食がトウモロコシの粉のおかゆ（polenta）であり，副食物が少ないため，ペッラグラというビタミン欠乏症の病気で苦しむ者が少なくない。

1882年春以降，ポー河下流域では失業と低賃金に抵抗する農業労働組合運動が急速に高まってゆき，ストライキが多発するようになった。マントヴァ県では1885年2月に，日雇農業労働者の賃金引上げを要求するストライキと，「ラ・ボイェ！」と叫んで気勢をあげるデモンストレーションが活発化した。農場経営者側は3月に譲歩して，賃金引き上げを認めた。ところがその直後に反動が起こり，1885年3月26－27日に官憲・軍隊は労働運動の指導者・活動家168名を一斉検挙した。マントヴァ県内および近隣諸県の労働団体はただちに強力な抗議・救援活動を開始し，社会問題として全国的な話題となった。

検挙者の大部分が起訴されることなく釈放されたが，指導者達22名が，刑法157条，159条違反（内乱使嗾），刑法247条違反（官憲に対する暴力的抵抗）等の罪名で――刑法386条のストライキ実行の罪ではない――起訴され，ブレッシァ高等裁判所において有罪とされた。約1年間の拘置の後，1886年2月16日にヴェネツィアの重罪裁判所において控訴審が開始された。裁判は同年3月27日，証拠不十分の理由により全員が無罪とされて結審した。[3)]この裁判の経過は詳細に報道され，裁判の後，北部イタリアの労働組合運動は大いに勢いづいた。

そこでこのラ・ボイェ事件裁判の被告のうち，サルトーリ，シリプランディ，バルビアーニの3名の経歴と思想について次にのべる。

エウジェニオ・サルトーリ（Eugenio Sartori）は1841年3月10日にマントヴァ県カステル・ダリオ（Castel d'Ario）の小地主の家庭に生れ，パヴィーア大学で数学と工学を学んだ。サルトーリはガリバルディの義勇軍に参加し，21歳の時には1862年8月29日のアスプロモンテ事件（ガリバルディ義勇軍とイタリア政府軍がカラブリアで衝突した事件）で逮捕され，入獄した。釈放後，1866年の対オーストリア戦争においては砲兵隊に入って戦い，その後，故郷のマントヴァに帰った。サルトーリはガリバルディの支持者であったが，父親の影響もあってマッツィーニをも支持して，その思想を紹介した。しかし1870年代のマントヴァ地方政治の中では自由＝穏健派（国会与党）の支持者であった。[4)]

サルトーリは1878年以来，労働者相互扶助活動に尽力し，1884年3月，マントヴァ県農民相互扶助協会（Società di mutuo soccorso tra i contadini della provincia di Mantova）の設立とともに会長に就任し，またこの協会の機関紙『自由言論（Libera Parola）』の社主となった。

マントヴァ県農民相互扶助協会は，規約第3条において会員を実質的に農業労働者に限定しており，第2条において，疾病による休業についての給付を行うだけでなく，労働者の報酬・賃金の漸増，資本と労働力の間の公正な均衡および土地労働者階級の福祉の達成という目的を掲げていた。この農業労働者の報酬・賃金の漸増を目指すという目的の具体策として，協会は1884年12月に賃金表を作成した。この賃金表は，日雇農業労働者の3つのカテゴリー（15歳以上男子，15歳以上女子，12歳以上15歳未満の男女年少者）と常雇農業労働者のカテゴリーについて，さらにそれらの職種を分け，それぞれに当面望ましい職種別時間当り賃金額または期間契約報酬額を提示したものであった。[5)]

サルトーリは裁判の証言の中で，協会の活動について次のような所信を述べている。[6)]

はじめ私は協会の設立に積極的ではなかったが，同じ被告の一人フィアッカドーリ（Natale Fiaccadori）が私に，我々農民は同じ労働者で人間なのではないかと言ったので心が動いた。協会は，紳士でなければ加入することができず，道義と，法と財産の尊重に立脚する。私は労働者に対し，ストライキを行う必要はない，なぜならばストライキは労働者自身を害するからであると言ってきた。協会の旗は赤旗ではなく三色旗（国旗）である。賃金表は道義的圧力であって，地主・農場主に適用を強制したものではなく，また地主・農場主の団体は我々の賃金交渉の申し入れを拒絶しつづけてきた。マントヴァ県農民相互扶助協会は疾病給付を行う目的で会費を集め，積立てたが，公安当局はこれをストライキ基金と見なした。

サルトーリは無罪となった後，労働協同組合運動と職業紹介所の設立を中心とする穏健路線の労働・農民運動の中心人物となった。しかし協同組合事業の失敗から一時ブラジルへ出国し，1890年頃帰国してミラノに居住した。晩年の消息は不明であり，没年も不詳である。

フランチェスコ・シリプランディ（Francesco Siliprandi）は1816年10月23日，マントヴァ県クルタトーネ（Curtatone）に生れた。青年時代にマッツィーニと連絡をとるようになり，1847年にはデモンストレーションを行ってオーストリア帝国の官憲に逮捕された。1848年には，パリでジュゼッペ・フェッラーリ（Giuseppe Ferrari，1811年生～1876年没，共和主義の革命家）と連絡をとり，2月革命に参加し，さらにイタリアに帰ってロムバルディーア解放戦争に参加した。解放戦争敗戦後もシリプランディはマッツィーニ派として活動を続け，一時スイスに亡命し，1853年2月6日のミラノ蜂起計画に失敗して逮捕された。恩赦によって出獄すると1859年の対オーストリア戦争に参加し，引続き1860年には元マッツィーニ派のジャーコモ・メーディチ（Giacomo Medici，侯爵，1817年生～1882年没）の麾下にガリバルディのシチリア遠征隊に参加し，1870年に大尉で退役して郷里に帰った。[7]

マントヴァに戻ったシリプランディは，当時イタリアではバクーニン派が優勢であったインターナショナル（国際労働者協会）の支持者となり，労働運動に関心を向け，1876年にマントヴァの西60kmにあるクレモーナ市で結成されたイタリア労働者総連合（Associazione Generale dei Lavoratori Italiani）に加わった。その後シリプランディは，マントヴァにおいて社会主義者サークルを結成し，機関紙『火花（Favilla）』の編集者となり，1884年7月にイタリア労働者総連合マントヴァ支部が結成されるとその中心的指導者となった。

1886年のラ・ボイェ事件裁判の時にはシリプランディは69歳であった。彼は裁判において，労働者階級が自ら賃金表を作成することは公的な権利であり，またマントヴァでは賃金を引上げなければ農業労働者は生きてゆけないという意味の証言をした。シリプランディが出版した冊子『農民の革命』の内容はローマ時代から現代までのイタリア史であり，人間の進歩を示す意図であったと述べ，また刑法に違反するストライキを扇動したことはないと証言した。[8]

シリプランディは，この裁判の後，高齢でもあり，第一線からは退いたが，著作活動を中心に労働運動と関わり続け，1890年1月に没した。

ジュゼッペ・バルビアーニ（Giuseppe Barbiani）は，1852年7月16日，ロムバルディーア州クレモーナ県スピネダ（Spineda Lombarda）に生れた。彼は自作農の息子として生れ，小学校卒業後，家で農業に従事し，青年期にはクレモーナ市へ出て給仕や店員として勤め，その後スピネダへ戻って小さな土地を借りて農民として暮らした。[9]

1876年にバルビアーニは，シリプランディ達がクレモーナで結成したイタリア労働者総連合に加盟し，読み書きができるのでオルガナイザーとして活動しはじめた。1884年イタリア労働者総連合マントヴァ支部結成後は，『土地労働者（Il Lavoratore della Terra）』紙の発行者となり，公安当局の資料によれば，身長1 m68cm ，黒っぽい栗色の髪と，鼻下に黒ヒ

ゲをピンと立てた，「ストライキを煽る破壊分子」となった。[10)]

1884年12月，前述のサルトーリが発行する『自由言論』紙に，バルビアーニの「労働者の十戒」という文章が掲載された。この内容を以下に簡略に示す。

I．わたしはあなたの神である。社会主義は被抑圧者の神である。

II．あなたはわたしのほかに，なにものをも神としてはならない。この世には金持の天国と，労働と貧困の地獄があるので，社会主義無くしては，諸君は苦悩・苦痛の生活を続けることであろう。

III．安息日を祝え。第7日（日曜日）は仕事を休んで勉強しよう。

IV．あなたの父母をうやまえ。老齢者と障害者の年金金庫を設立しよう。

V．あなたは殺してはいけない。常備軍の廃止。戦争反対。

VI．あなたは姦淫してはならない。人々が生きようと欲するなら，諸君と同じように働かねばならない。

VII．あなたは盗んではならない。なんら働くことなく，人々の汗の結晶を持ち去ってはならない。

VIII．あなたは偽証してはならない。司祭や君主や雇主を信用してはならない。

IX．あなたは隣人の家をむさぼってはならない。労働に立脚する真の平等の獲得を目指そう。

X．あなたは他人の弱さにつけ込んではならない。女性と障害者を尊重しょう。

人民の三つの美徳とは，自由，平等，兄弟愛である。[11)]

バルビアーニはラ・ボイェ事件裁判の後も活動を続けた。当時のイタリアの労働運動家の多くがそうであったように，バルビアーニもバクーニン派のインターナショナルに親近しており，クレモーナ無政府社会主義者サークルを作って，パリ在住のイタリア人無政府主義者達と通信していた。1890年3月，バルビアーニはついに公務執行妨害と公安法違反の罪名で2カ月半の禁固刑と罰金の判決を受け，スイスへ亡命した。彼は1891年9月に帰国し，1892年8月15日に創立されたイタリア社会党に加盟した。しかしその後2度逮捕され，1894年11月19日には2年間の居住地指定刑（流刑）を宣告され，その日スイスへ亡命した。バルビアーニは1897年に帰国し，クレモーナのカーメラ・デル・ラヴォーロ（労働会議所）に所属して農民運動を続けたが，1909年以降は消息をつまびらかにせず，1939年12月9日，87歳で故郷スピネダに没した。

## 注

2）Rinaldo Salvadori (a cura di), La boje!, Avanti, Milano, 1962, P.222.

3）Francesco Scalambrino, Il processo de "La boje":La corte e il potere esectivo, in Movimento operaio e socialista, N. 3 Anno VII 1989, Rosenberg & Sellier, Torino, pp.249～256.

4) Franco Andreucci, Sartori Eugenio, in Franco Andreucci, Tommaso Detti (a cura di), Il movimento operaio italiano, Dizionario biografico 1853−1943, 5vols, Riuniti, Roma, 1976, vol.4, pp.529〜531.
5) R. Salvadori, La boje!, op. cit., pp.271〜280.
6) Ibidem, pp.49〜54.
7) R.Giusti, Siliprandi Fracesco, in Il movimento operaio italiano, op. cit., vol.4, pp.636〜640.
8) R.Salvadori, La boje!, op.cit., pp.66〜69.
9) F.Andreucci, Barbiani Giuseppe, in Il movimento operaio italiano, op. cit., vol.1, pp.170〜171.
10) Istituto Alcide Cervi, Campagne e società nella valle Padana di fine Ottocento, Grafis, Bologna, 1985, pp.150〜152.
11) R. Salvadori, La boje!, op. cit., pp.269〜270.

## III. エミリア・ロマーニャ州の農民運動家

前章で述べたロムバルディーア州マントヴァ県がポー河の北側にあるのに対し，ポー河を隔てた南側にあるのがエミリア・ロマーニャ州であり，ロンバルディーア州と同じく農業における資本主義の発達した地帯であって，また20世紀初めにはイタリア社会党最大の支持基盤ともなっていた。本章においては19世紀末から20世紀初めに，このエミリア・ロマーニャ州ボローニャ県と同州レッジョ・エミーリア県で活躍した2人の農民運動家に注目したい。

「モリネッラ農民運動のパイオニア」と呼ばれるジュゼッペ・マッサレンティ（Giuseppe Massarenti）は，1867年4月8日にボローニャ県モリネッラ（Molinella）に生れた。成人後の身長1 m65cm，明るい栗色の髪と灰色の眼をしていた。中農の家に生れた彼は，ボローニャ工業専門学校に入って数学を専攻した。[12]

モリネッラでは資本家的水田稲作経営が盛んであり，これに対抗して農業恐慌下の1880年代から日雇農業労働者の労働組合が組織され，活発に運動していた。マッサレンティは十代の終わり頃に社会主義サークルに接触し，農民運動に参加し，1886〜1887年の稲作労働者の争議中に官吏侮辱罪で逮捕され，罰金刑を課された。1887年8月には「労働の自由」を侵害したかどで検挙されたが，これは証拠不十分で釈放された。この頃彼はボローニャ大学薬学部に入学し，1893年に薬学士号を得たが，その後も聴講生として大学に在籍していた。1889年7月，モリネッラ民主協会が設立された時，マッサレンティはこのグループのリーダーの一人となっていた。

マッサレンティは，1892年7月にモリネッラの農業労働者の抵抗同盟（労働組合）の執行委員長となり，この年の争議に活躍し，そのため1893年5月22日に公安法違反で100リラの罰

金刑を課されている。彼は1892年8月のイタリア社会党創立大会に参加した。また彼は1893年12月と翌年1月にファッシ・シチリアーニ支援デモを組織している。

1896年4月にマッサレンティは社会主義者選挙同盟をモリネッラに組織し，同年には当地に消費協同組合を設立した。この頃のマッサレンティについて公安当局の資料は，「彼は，陰険，不寛容，強情な性格だが，暴力的ではなく，向う見ずでもない。彼は，豊かな親戚からの援助と社会党の手当で生活している。農業労働者は彼を頭目のように見ており，彼の命令に盲従し，それを実行する。彼は下層の民衆と親しみ，労働者を避けることがない。」と記録している。[13)]

1897年のモリネッラの稲作日雇農業労働者の争議は大規模で深刻なものであった。稲作労働者の組合の要求の中心は，賃金の引上げと，作業監督を労働組合が選任することであった。1897年6月20日，労働組合は，借地農や自作農の団体から提案された妥協案を蹴ってストライキに突入した。7月，県知事は官憲・軍隊によって労働組合員多数を逮捕したが，マッサレンティは逮捕を逃れた。弾圧という強硬策だけではなく，モリネッラ市長，市議会議員，治安警察，労働組合の4者が協議する争議の調査・仲裁委員会が設置されたが，収拾は困難であった。ストライキは約2カ月間続行され，ストライキ参加者は全国から寄せられた義援金によって飢餓に耐えた。結局8月になって，賃金に関する経営者側の若干の譲歩を労働組合側が受けいれて，この年の争議は終わった。[14)]

この争議についてマッサレンティが，社会党下院議員コスタ（Andrea Costa）に送った手紙には，軍隊の下士官らがストライキ参加労働者に向って，「仕事をしたくないのか。冬になって，お前達が仕事をくれと市役所にやってきた時には，鉛弾を腹いっぱい食わせてやるぞ」と言って挑発したと記されている。[15)]

マッサレンティは，1898年3月31日に1890年改正刑法247条「法律への不服従をあおり，もしくは治安を危くするような諸社会階級間の憎悪をあおること」の容疑で逮捕され，さらに同年5月13日には，同年春の全国暴動，とりわけ5月6～7日のミラノ事件の直後の大弾圧によって再び逮捕されたが，いずれについても後に無罪となった。しかしこの年，マッサレンティの属する労働団体はことごとく解散させられた。

20世紀に入るとともに労働運動は息をふきかえした。モリネッラの労働組合や協同組合も公然活動を再開したが，マッサレンティ自身は1901年11月3日ついに有罪判決を受け，1902年3月23日に控訴棄却，有罪が決定すると同時にスイスに亡命した。彼は翌1903年12月に一時帰国したものの再びスイスへ逃れ，1905年12月の恩赦によってモリネッラへ戻った。

1906年11月6日のモリネッラ市長選挙においてマッサレンティは市長に選挙された。市長としてマッサレンティは社会改良に大いに努力し，また1908年にはボローニャ県評議員にも選出された。彼は1910年にはモリネッラ農業協同組合の代表に就任した。

1914年，モリネッラでは小作農と地主との間に激しい紛争が生じた。小作農が小作契約の改善を要求してストライキに入ったのに対して，地主側はヴェネト州から「スト破り」労働者を貨物自動車7台に乗せて連れて来た。これを阻止しようとした農民がグヴルダ村で「スト破り」労働者を棍棒で襲撃し，地主と護衛が銃を乱射して応戦し，「スト破り」労働者5名が死亡したほか，双方に重軽傷者多数を出した。この事件後の官憲の追求によって204名の農民が起訴され，マッサレンティも農民側指導者の一人として追われ，サン・マリノ共和国へ一時亡命した。この頃，マッサレンティの名を知らぬ者はボローニャ県には一人としていないほどになった。

第一次世界大戦後，1920年11月にマッサレンティは再びモリネッラ市長に選出されたが，このころから農村ファシストの暴行が激しくなり，マッサレンティはファシストの攻撃目標となった。ムッソリーニ政権樹立後マッサレンティは1926年12月1日に5年の禁固刑を宣告され，1931年に出獄したものの収入が絶え，住み家を失い，1935年頃にはヴァティカンのサン・ピエトロ広場の柱廊で浮浪者生活を送った。1937年には治安当局によってローマの精神病院へ収容され，1944年のローマ解放後に自由の身となった。1948年，マッサレンティは上院議員に推薦され，1950年3月31日，82歳で死去した。

カミッロ・プラムポリーニ（Camillo Prampolini）は1857年4月27日，レッジョ・エミーリアの中産階級の家庭に生れた。彼は十代後半まで，両親と同じように国王を崇敬し，敬虔なカトリック信者であった。1877年に彼はローマ大学法学部に入学したが，じきにボローニャ大学に移って1881年に法学士となった。在学中に彼は社会主義思想の強い影響を受け，労働者の権利を主張するようになった。[16)]

プラムポリーニは大学卒業後，保険会社に短期間勤め，1889年には地元の商業会議所の書記次長として数年間勤務したが，思想上の問題で解雇された。というのは，彼は大学卒業後，社会主義系新聞社の記者としても活動していたからであって，ことに1886年1月創刊のレッジョ・エミーリアの社会主義系週刊新聞『正義（La Giustizia)』とは深くかかわっていた。彼はまた協同組合運動にも熱心にとりくみ，当時著名な社会主義者数名との交際を深め，1892年の社会党の創立に参加した。

プラムポリーニは，1895年5月の下院総選挙において，逮捕された社会主義者の代りに抗議候補者として立ち，レッジョ・エミーリア県グヴスタッラ区において初当選し，その後も1905年の選挙で落選したほかは続けて社会党国会議員を勤めた。国会議員としての彼は，社会改良立法の推進と，小商人や中産階級と労働者・農民との連合を主張し，また1902年にはレッジョ・エミーリア県農民協同組合会館の設立に尽力し，1904年以降度々レッジョ・エミーリア貯蓄金庫頭取を勤め，その他いくつもの労働団体の役職に就いた。

プラムポリーニはフィリッポ・トゥラーティ（Filippo Turati）と親しく，社会党改良派の幹部であり，1916年4月の第2インターナショナル，キーンタール大会に出席した後では以前にも増してロシアのボリシェヴィキ即ちレーニンを批判し，イタリア社会党内左派と対立するようになった。第一次大戦後の1921年，彼は，ファシストに襲撃されたが逃れた。イタリア社会党は1922年10月に何度目かの分裂を行ったが，プラムポリーニは改良派の同志と1922年10月4日に統一社会党（PSU）を結成した。彼は，1924年にファシストが統一社会党下院議員マッテオッティ（Giacomo Matteotti）を暗殺した事件の頃は，イタリア共産党（1921年1月21日に社会党から分離結党）との反目もあって，「合法主義」の立場をとった。ムッソリーニ政権下の1925年，プラムポリーニはミラノに隠退し，1930年7月30日に73歳で死去した。

次にプラムポリーニの有名な論文「クリスマスの祈り（La predica di Natale）」を要約紹介する。この論文は『正義』1897年12月24－25日号に掲載されたもので，農民大衆のキリスト教信仰と社会主義とを直結しようとしたものであり，当時諸方面に賛否の大反響をよび，またこの記事によって『正義』紙は教会から破門された。

イエスは，人間はすべて天にいる父なる神の子供であると深く確信していた。そしてイエスは，神を窮極的な正義であり善であると思っていた。それならどうして世界には多くの不正が存在するのか？どうして人々は金持と貧民，主人と奴隷に分かれているのか？否――イエスは考えた――明らかにこの不平等は人間の無知と悪業からのみ生じている。神が不平等を望むはずがない。確かに神は人々が兄弟のように――共同の富を平和に正しく分け合うことによって――生きることを望んだ。そして他人の不幸を喜こび，他人と争う狼のような暮しは，もうしないことを望んだ。

よし――イエスは仲間に言った――私達は，私達が生れたこの苦しくつらい不正の国と戦わなければなりません。私達は「神の国」――すなわち正義，平等，人類愛の国――を強く望まなければなりません。私達は兄弟達に，神の国は可能であり，夢ではないということを説得しなければなりません。私達は兄弟達に信仰を注ぎこまなければならず，そうすれば「神の国」は実現するでしょう。

これこそキリストの祈りである。すべての不正と不公平に対する深い嫌悪，平等，兄弟愛，平和，幸福への燃える思い，この思いを実現するために闘うことのやむにやまれぬ必要，ここにキリスト教の魂，本質，真実にして神聖であり不朽の部分がある。

諸君は悪と闘うために何をするのか？諸君は善を実現するのに何をするのか？

だがもしも諸君が，諸君をとり囲む悲惨や不正に無関心であるなら，もしもそれらを消滅させるのに何もしないなら，諸君はキリストと弟子達の共同体に参加できないし，彼らの教義を全く理解していないし，自分達をキリスト教徒と呼ぶ権利を持たない。

クリスマスの今日，諸君がかのナザレの人の誕生を祝っている時，社会党に加盟した私は言う。私達はキリスト教徒であるが，しかし言葉の高い意味と真実において，私達は労働者である。

イエスの望んだ「神の国」はいまだ実現していない。今———諸君が見ているように——一イエスが闘った不正と悲惨はかつてなく活発である。しかも少数のものはぜいたくの中ですべての生活の快適さと快楽を享楽している。しかしパン，教育，訓練が欠乏しており，過労あるいは仕事の欠乏によって疲れきっていて，そして飢えや生活の必要と毎日闘っている何百万人もの人々がいる。そして大なり小なり惨めなこの何百万人の中には，農業労働者である諸君もいるのである。

この不正は取り除くことのできるものである。もしも農村と都市の労働者達が握手するならば，もしも彼らが正義を信ずるならば，もしも彼らが，人間は平等であり，結局誰も一方が主人と呼ばれて他方の負担で生活するという権利を持たず，すべての者が生存に必要な共同の労働に加わる義務をもつことを理解するならば，もしも人間的に生きようとするならば———すなわち自由となり，主人を持たず，自らの労苦の果実すべてを享受するということ———，労働者が孤立し競争する代りに，キリストが命じたこと「互いに兄弟のように愛しあいなさい」そして何処にでも連帯を作るということを実行しはじめたなら，その時には，労働者の高まる団結の前には，社会的不正はあたかも陽が昇って闇が消え去るように消滅するであろう。そうしてキリストが熱望した善と喜びの世界「神の王国」が樹立されるのである。それを樹立させるべく働こう，労働者諸君！

団結せよ，連帯せよ！諸君のため，妻のため，子供のために。諸君のもっとも根源的な利益の擁護のため，諸君のもっとも明白な権利をかちとるため，諸君の階級の義務としての解放のために。

イエスは有名な山上の垂訓において言われた。「義に飢え渇いている人たちは幸いである。彼らは飽き足るようになるであう。義のために迫害され悔られてきた人たちは幸いである。」

諸君は私達とともに闘うであろう。なぜなら私達社会主義者は，今日，キリストによって始められた社会大革命の唯一かつ真実の継承者であるからである。私達は「義に渇く」者である。私達は，貧しい者，被圧迫者，とるに足りない者，見すぼらしい者，抑圧された者，卑しい者，踏みにじられた者の，人間の平等と書かれている旗を再び高く立てているのである。私達———労働賛歌に歌われるようにすべての富の生産者———は，世界中の富める者に対し，労働者の王国と確実な勝利を宣告する。私達はこの王国の到来を早めるために努力している「義のために迫害され侮られてきた」者である。[17)]

注

12) L. Arbizzani, Massarenti Giuseppe, in Il movimento operaio italiano, op. cit., vol.3, pp.350～359.
13) Campagne e società nella valle Padana…, op. cit., pp.153～162.
14) Sergio Zaninelli (a cura di), Storia del movimento sindacale italiano, vol. I. Le Lotte nelle campagne dalla grande crisi agricola al primo dopoguerra1880-1921, pp.153～154.
15) Carlo Cartiglia (a cura di), Socialisti riformisti, Feltrinelli, Milano, 1980, pp.338～340.
16) R. Cavandoli, Prampolini Camillo, in Il movimento operaio italiano, op. cit., vol.4, pp.216～229.
17) Camillo Prampolini, La predica di Natale, in Carlo Cartiglia, Socialisti riformisti, op. cit., pp.124～126.

## IV. 総括

本稿にとりあげた5人の農民運動指導者は，数多くの指導者達の中でも特に個性的であると筆者には思える人々であり，その意味では，彼らは19世紀末北イタリア農民運動家の平均的な像を示すものではない。しかしそれだけに彼らは，一層際立って時代と地域と運動の特徴を表現している典型的人物であるように筆者には考えられる。そのような前提のもとに彼らと運動の特徴を以下に総括したい。

第一の基本的特徴として，ここに述べたポー河下流域における農民運動とは，農場経営者と農業労働者との労資関係，もしくは地主と零細な分益小作農との関係———すなわち分益小作契約という形式の限りでは寄生地主制の一種であるが，アジア的寄生地主制とはかなり異なる性格の，より労資関係に近いもの———における農民運動であり，その意味で農民運動指導者とは土地労働者（il lavoratore della terra）の組合運動の指導者であるという，運動の社会的性格の近代性をあげることができる。

第二に彼らの思想的特徴には世代的変化がみられる。1880年代の農民運動指導者は，リソルジメント（近代イタリア独立統一運動）の革命的な民主共和主義思想，ことにマッツィーニとガリバルディの思想を継承しているという意味で，ナショナリステイックであるということがあげられる。そしてまた1871年のパリ・コミューン事件以降，第一インターナショナル（国際労働者協会）の影響がイタリアに及び，イタリアにおいてインターナショナルを代表する思想家とみなされたバクーニンの無政府主義思想が彼らに多かれ少なかれ影響したことも見てとれる。しかし，1892年のイタリア社会党創立時の，社会主義派(ただしマルクス主義，ブノア・マロン＜Benoit Malon＞の完全社会主義，労働者主義，協同組合主義その他諸々の思想潮流を含む）と無政府主義派（マラテスタ＜Errico Malatesta＞他の諸潮流を含む）

との分裂以後，この地方は社会主義派の地盤となり，プラムポリーニやマッサレンティのような1890年代以降のリーダー達は，この時代にはマルクス主義に接近した社会党改良派に属していたのである。彼ら19世紀末の人々の思想を今日の社会思想のカテゴリーによって割切ることは難しいが，民主共和主義が農民運動を開拓し，社会主義とともに運動は成長したとも言える。

第三に，彼らはキリスト教———普遍的 cattolico 信仰である———を，自覚的に思想上の対立の課題としなければならなかったことがあげられる。彼ら指導者が依拠するリソルジメントの革命的民主共和主義思想にせよ社会主義思想にせよ，政治的社会的態度としては明らかに反教皇庁・反教権主義である。しかし大衆運動の指導者としての彼らは，農民大衆のキリスト教信仰と対立して，真っ向から無神論をふりかざしたり，キリスト教を無視したりすることはできない。この問題に関して彼らには少なからぬ矛盾・混乱があったと考えられ，例えば「労働者の十戒」や「クリスマスの祈り」のような宣伝文書は，キリスト教の信仰についての，彼らの殆んどデマゴギーに近い対応を示すものであると考えられる。そしてさらに一般化すれば，このような矛盾・混乱の現実的解決策として「聖俗分離」が主張されていたものと考えられる。

第四に，農民運動の歴史性と自然発生性という性格があげられる。農民大衆の組合運動すなわち「経済的抵抗」や「相互扶助」の活動は，指導者の民主共和主義思想や社会主義思想とは相対的に別個の，はるかに古い歴史的起源をもつものが大衆の中に保存・記憶されてきて，それが指導者のイニシアティブにあわせて発現したものであると考えられる。その意味で，おそらく，指導者の政治的社会的思想と，農民大衆の持つ組合やストライキについての観念との間にも，なにがしかの差異・矛盾があったであろうと考えられる。

第五に，興隆する時期の社会運動が常にそうであるように，19世紀末北イタリアの農民運動も次々と新しい運動の担い手を生み出し，育ててきた。新しい担い手はまた新しいアイディアを運動に持ちこみながら，労働組合，協同組合，労働者政党などの発展の推進力となった。本稿でとりあげた指導者達もそのような多くの人々の中の5人であることを最後に述べておきたい。

# I *leaders* del movimento contadino in Italia settentrionale (1885-1897)

Ryusaku YOKOYAMA

Questo saggio prova a capire i caratteri storici del movimento contadino nella valle Padana di fine Ottocento, per mezzo di i pensieri e le attività dei cinque *leaders* seguente.

Eugenio Sartori, Francesco Siliprandi e Giuseppe Barbiani. I tre *leaders* del movimento contadino di Mantova, chi sono gli imputati del processo di "La boje !" nel 1886.

Giuseppe Massarenti e Camillo Prampolini. I due *leaders* del movimento contadino nel Emilia-Romagna.

Nella valle Padana coloro che svolgevano il movimento contadino erano i lavoratori della terra — i braccianti, gli obbligati e i mezzadri — dell' agricoltura capitalistica, e le loro organizzazioni — le società di mutuo soccorso, le leghe di resistenza e le cooperazioni —.

I tre pensieri sociali — la democrazia rivoluzionaria del Mazzini e del Garibaldi nel Risorgimento, gli anarchismo del Bakunin e il socialismo — avevano influenze sui *leaders*.

I *leaders* erano gli anticlericalisti, ma essi tenevano conto del cristianesimo della massa contadina.

I *leaders* hanno guidato il movimento contadino, ma essi non hanno scoperto il mutuo soccorso e lo sciopero. L'attività della resistenza economico del mutuo soccorso e dello sciopero è il movimento spontaneo che ha la storia prima del socialismo moderno.